

お茶の時間

キーワードは皇国

編集委員長

「皇国」という言葉は、明治以降に広まったものだと思ひ込んでいたが、どうも違ふようだ。

切つ掛けは、嘉永6年（1853年）

6月3日の黒船来航のようである。

驚いたのは、浦賀の漁師や江戸幕府の幕閣の要人だけではなかつた。日本人全てが、たつた4隻の黒船にたたき起こされたのである。

幕藩体制を越える強敵が現れた時、初めて日本人は「国」とか「日本人」という意識を持ったのではないか。

それ以来、明治維新までの怒涛の15年間、尊王攘夷派も、開国派も、佐幕派も、討幕派もいろいろな文章の中で使用している。坂本龍馬で有名になつた「薩摩と土佐の盟約」の短い文章に6回も繰り返して「皇国」が出てくる。

吉田松陰の言葉にも「凡そ皇国の皇国たる所以は、天子の尊、万古不易なるを以てなり。いやしくも、天子を易ふべくんば、……即ち皇国を志那、印度と何を以て別たんや」とある。

幕臣であつた勝海舟が、山岡鉄太郎に託した西郷隆盛に宛てた書簡には、

次のような文がある。

「無偏無党、王道堂々〔蕩々〕矣、今官軍都府に逼るといへども、君臣謹んで恭順の道を守るは、我が徳川氏の士民といえども、皇国の一民なるを以てのゆえなり。且つ、皇国当今の形勢、昔時に異り、兄弟牆にせめげども、その侮を防ぐの時なるを知ればなり」

この言葉は、中国の古典『詩経』の「兄弟鬩于牆、外禦其務」踏まえたもので、海舟は、自分たちが徳川家に仕える人間でありながら官軍に恭順するのは、「現在の日本の形勢は昔と違つて同胞が争つている場合ではなく、外国からの侵略の危機に一致団結して立ち向かわねばならないことを認識しているからである」と言っている。

なぜこの時期、「皇国」という言葉が使用されたのかを考えてみると、外圧に押しつぶされそうになつた時、国家意識の高揚のためには、心を燃え立たせる熱い言葉、キーワードが必要であつたのではないだろうか。

それが「皇国」であつたのだろうか。今、目覚ましい中国の海洋進出と、間接的な脅威から直接的な脅威に変わりつつある北朝鮮の核・ミサイル問題を前に、日本も強い国家意識を持つて対応せねばならない。

かつての「皇国」に代わる新しいキーワードは、なんであるだろうか。